

僕のおうちも景色の一部

この「僕のおうちも景色の一部」という標語は、観光振興のために美しい風景を育てようとする日本交通公社の呼び掛けに応募した小学生の作品だそうだ。

この小学生のような気持ちで世の中の多くの建築行為が行われたなら、さぞかし身の回りの風景は違うものになったのではないかと考えさせられる。と同時にこの標語は、私にたいして「今まで何やってきたの？」って痛烈な批判を浴びせかけているようにも聞こえて耳が痛い。

目を市街地に転じてみよう。わが国の街並みがなかなか視覚に耐えられるようになるどころか、経済成長とは裏腹に、ますます支離滅裂で混沌としてきていると感じている人は少なくないのではないだろうか。

こうした現実を前にして、僕に何ができるのかなーと考えながら仕事を続けてそろそろ 30 年になろうとしている。

振り返ってみると、若い頃建築家に憧れ、大学で建築学を専攻。憧れの建築家への道は、一見カッコいい建築家と言われる先生が“掃き溜めに鶴”と言って、自らの作品を難解

な理屈で正当化し街を壊してゆく実態を知れば知るほど色あせてゆき、私の能力の限界も手伝って建築家になろうとする意欲を失っていった。

そんなとき都市計画という職能の存在を知り、群建築の形態規制、都市デザイン、ランドスケープ等、つまり都市計画こそこれからの日本に不可欠な職能と考え今に至る。

そして、人生のほぼ折り返し点を過ぎた今、若い頃めざした志、「美しい風景、心地良い環境づくり」にどのくらい貢献できたのだろうか、そう自分に問うことが多くなってきたような気がする。

これまでの私はもっぱらニュータウンのマスタープラン、つまり土地利用、造成、街並み計画の立案に従事させていただいていたが、実際の家づくりや街並みづくりはもっぱら民間企業にお願いするところまででお終いということが多かった。建ち現れる街並みを想起しながら、美しい建物を誘発する土台づくりに精を出すわけだが、悲しいかなこれは上手くいったと自信を持って紹介できる仕事はそんなに多くはない。

本来街並みデザインなど必要とし



アトリエU
都市・地域空間計画室代表
宇野健一



写真 1 路地に接する旗竿宅地。路地を活かした開放的な庭が歩く人を楽しませてくれる

ない環境を生み出すのがマスタープランナーの腕の見せ所となるわけだが、骨格的な街の構造は何とか死守できたとしても、開発の規模が大き過ぎることもあって、住宅地の隅々にわたるディティールデザインにまではなかなか踏み込めず、住宅地は往々にして退屈な直線道路と1画地ごとの敷地境界を明確にする擁壁で占められることになる。そんな画一的な住宅地に建つ住宅がいくら建物のデザインや街並みづくりや外構に力を入れても、どうしたって取って付けたような違和感が漂うものだ。

住宅を提供する側の一方的な価値観の押し付けによる住宅地のつくり方にたいして、一生懸命肯定しようとする自分と、一方で何だかおかしいかと否定する自分が常に同居していて、何だかすっきりしない思いを拭えないまま時間が過ぎていく。

もちろん、これまでにいくつかこれは上手くいったかなと自己満足している住宅地もあるにはある。その一つが「みなみ野シティコンサージュ」と名付けられた住宅地だ(写真1)。その名の通り八王子みなみ野シティの南部にある。外周を取り巻く自然地形に沿わせて道路をくねくね折り曲げ、街区は旗竿ありきで普通では考えられない大きな街区にし、旗竿敷地がむしろ価値が高くなるよう街区内に環境とコミュニティの孵化装置として団地住民共有の路地を張り巡らせた。外周の道路がくねくねしているの、1戸たりとも同じ条件の敷地はなく、建てられた住宅も必然的に1戸1戸微妙に向きが異なっていて、全体としては少し散らかった感じになっている。「画一的な風景をどうやって崩すか」という勝手に設定したテーマにたいして多少は応えられたかなと思っているが、これ



写真2 共用通路沿いの街並み。道路と宅地の関係が緩やかだから一体感が生まれる。

は本誌でもお馴染みの積水ハウスの上井さんのご尽力によって実現した。もう一つは多摩ニュータウンN-CITYの一角に建つ「ヴィレッジ浄瑠璃14」と名付けられた14戸のコーポラティブ住宅だ(写真2)。

この住宅地は2000年の春から参加者募集を開始し2004年の春竣工した。実はこのヴィレッジ浄瑠璃14が建つN-CITYは、1995年に都市設計工場の成瀬さんと一緒にマスタープランづくりに関わった思い出深い場所で、そのとき、どさくさにまぎれて緑地沿いに忍ばせていたのが、この住宅群が建つ2,000㎡の小規模低層集合住宅用地だった。不幸にもその土地がなかなか売れずに放置されていたことが幸い、そこに目をつけた地元のNPO FUSION「夢見隊」が理想の街づくりと家づくりをコーポラティブ方式によって実現しようとしたのがプロジェクトの始まりだった。結局売れ残りの責任を取るといふかたちで私もかかわることになるわけだが、参加者募集に2年、建設に2年という普通の家づくりではとても考えられない時間をかけて完成したこのコーポラティブ住宅は、2

戸1連棟長屋5棟、4戸1重層長屋1棟によって構成されている。敷地はみんなの共有だから敷地境界を明確にする擁壁やフェンスは一切ない。外構も空間を与えて後は住民にお任せだ。全14戸が寄り添うように建っていて、ちょっと粗野な感じがするが、土地が切り刻まれた感じがなくて、図らずもほっとする空間が生まだされた。それは年とともに深みを増しているように思われる。当たり前のことなのかもしれないが、長い時間をかけその土地と居住者との会話を重ねた分、生み出される空間は濃密になるのかもしれない。

「僕のおうちも風景の一部」という標語は、今、自分を奮い立たせると同時に、そのような気持ちで暮らそうとする人をどうやって増やしていくかという新たなテーマになっている。

宇野健一(うの・けんいち)

日本大学大学院理工学研究課修士課程中退。1986~93年アルテップ、1993年アトリエU都市・地域空間計画室設立。夢見隊チームリーダー。